治水の英雄伝

因藤彌兵衛

発行所・財団法人人間自然科学研究所
理事長　小松昭夫
松江市乃木福富町735-188松江湖南テクノパーク内
TEL 0852(32)3636
制　作・テラプロ
松江市淞北台32-20
TEL 0852(24)5410

治水の英雄伝

因藤彌兵衛

発行所・財団法人人間自然科学研究所
理事長　小松昭夫
松江市乃木福富町735-188松江湖南テクノパーク内
TEL 0852(32)3636
制　作・テラプロ
松江市淞北台32-20
TEL 0852(24)5410

1

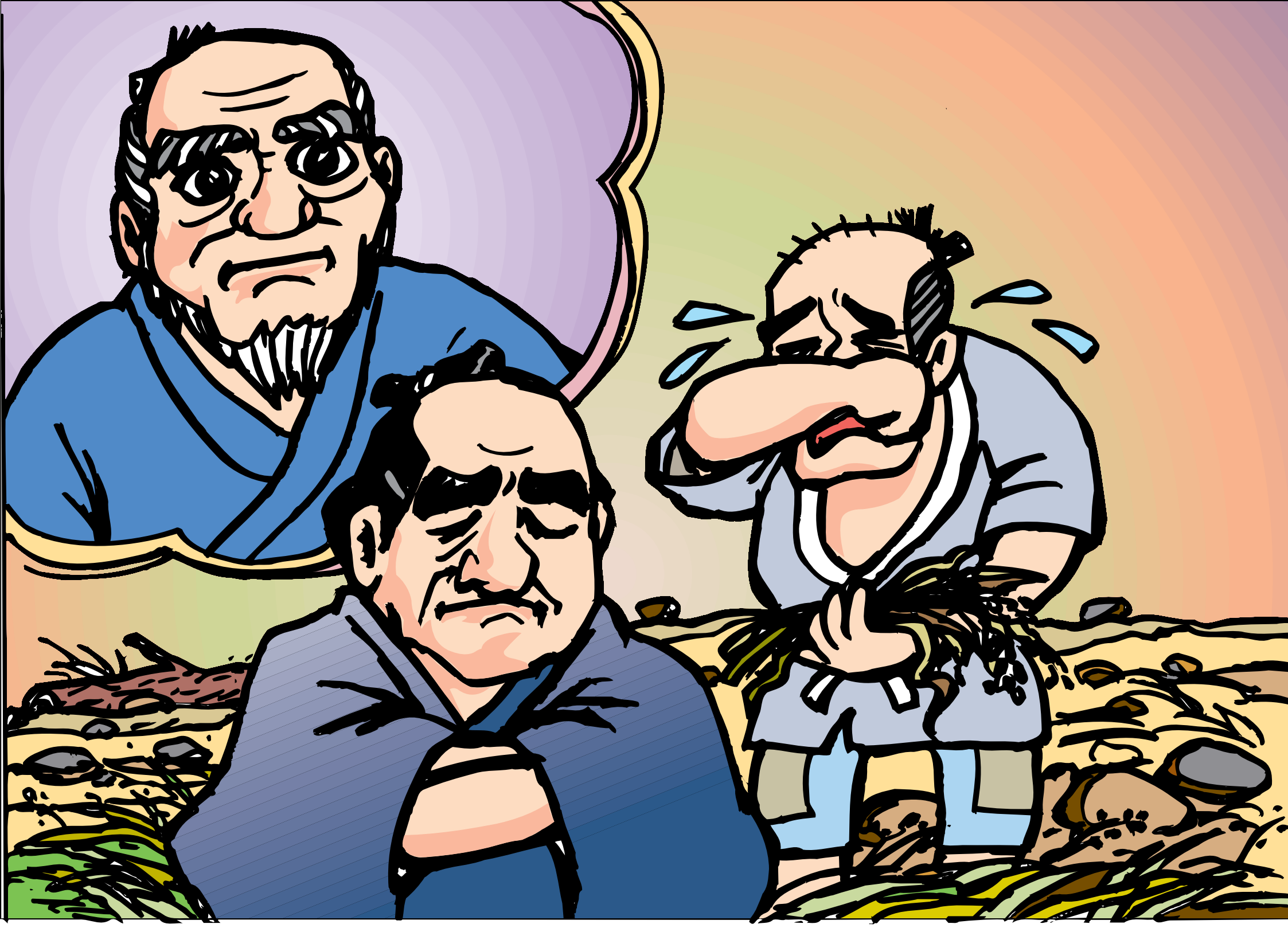
この物語は今からおよそ三百年の昔、
出雲の国、意宇郡日吉村、
今の松江市八雲町日吉というところの話しです。
ときに元禄十五年、西暦一七〇二年、
日吉村剣山のふもとに、ひときわりっぱなお屋敷がありました。
意宇の郡六十七の村々をたばねる下郡役、
周藤彌兵衛の屋敷です。
おじいさんにあたる初代彌兵衛家正から、三代にわたり
下郡役を務め、農民たちからも厚い信頼をえていました。

2

「彌兵衛のだんさん、田んぼの稲もホラ元気よく
育っておりますワ」
「オ・・良い米になりそうじゃな」と、
笑ってみせる彌兵衛だったが、
吹き抜けるなま暖かい風と、
西の空にひろがる黒い雲に
不吉な予感を抱きました。

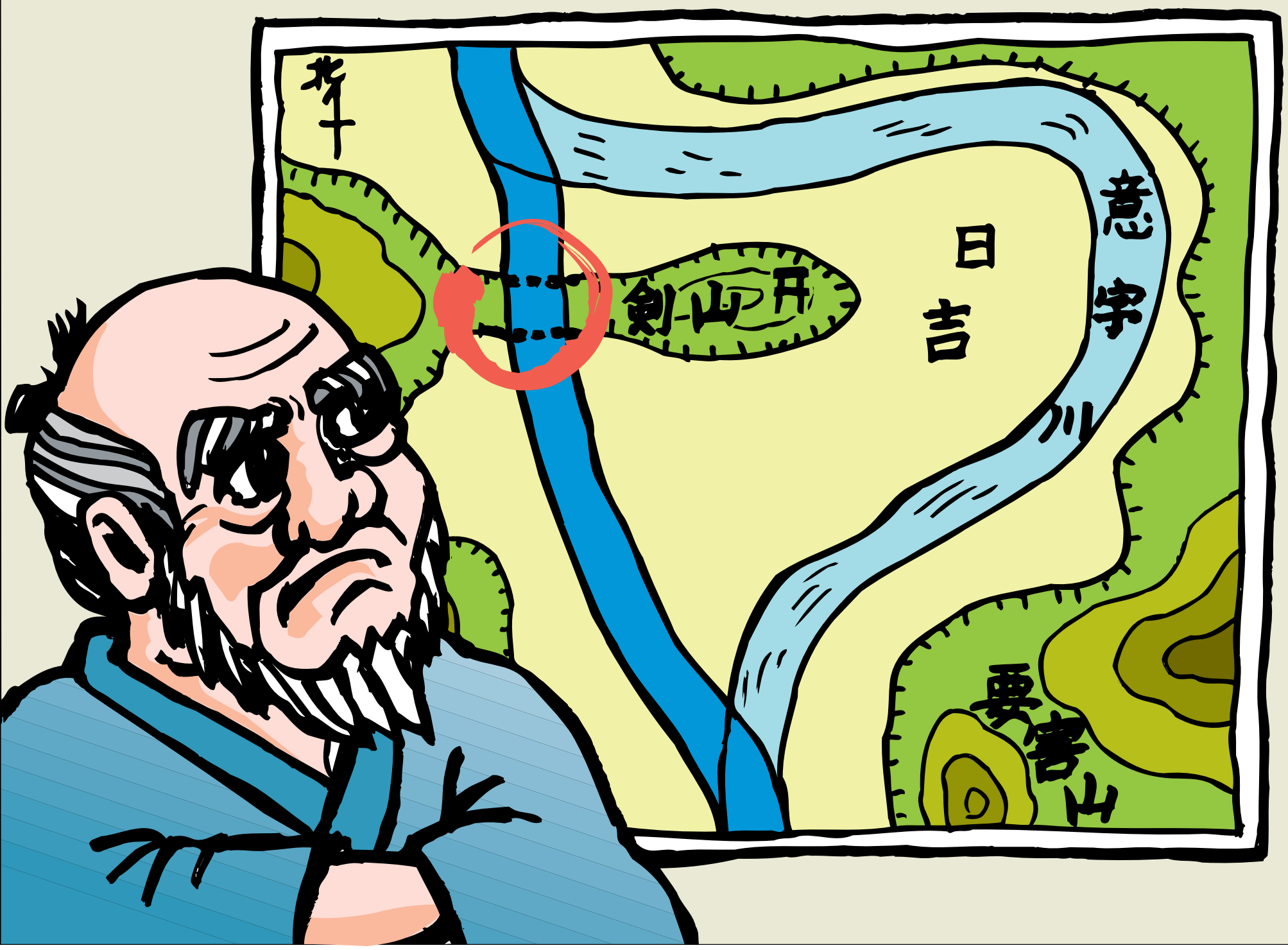
3

それは八月のこと、出雲地方を台風が襲った。
見たこともないような大粒の雨が
激しい風とともに容赦なく降り注ぎ、
日吉村を流れる意宇川の水は濁流となって
村に襲いかかったのです。
この元禄十五年八月の大水害は出雲地方に
大きな被害をもたらしました。
死んだ人五十人、人家四千戸以上が流され、
農作物は壊滅的な状況であったと言われています。



4

「ああ・・・だんさん、米が・・・畑が・・ゼンメツです・・」
声もなく立ちすくむ農民。彌兵衛もまた同様であった。
この意宇川は毎年、少しの雨で氾濫を繰り返し、
日吉村に少なからず被害をもたらしてきました。
しかしこれ程の大水害になるとは・・・
彌兵衛は小さい頃から父によく聞かされていた
「家正じいさん」の話が頭をよぎりました。
初代彌兵衛家正もまた下郡役をつとめておりましたが、
この日吉村の洪水の多さに頭を痛めていたのです。



5

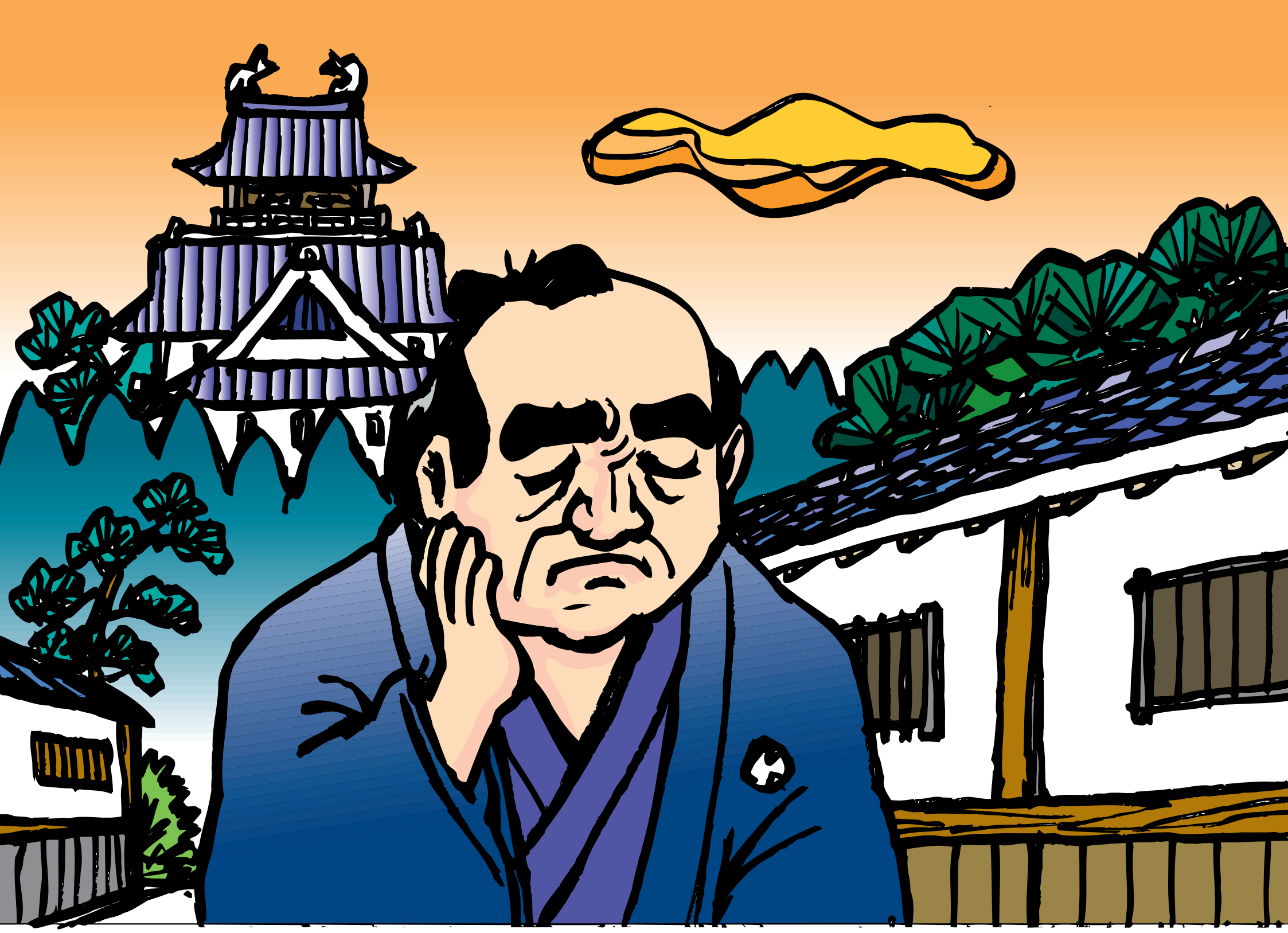
意宇川の流れは要害山に沿って大きく
迂回しているため堤防を破壊されやすいことに
気づいた初代彌兵衛は、
意宇川の流れ変えることを考えたのです。
剣山に穴をあけ、水の流れを
まっすぐにして下流に流せば洪水は
防げるにちがいない。
このことを松江藩、時の殿様松平直政公に
申し出ると、藩の普請事業として
工事されることとなりました。

6

岩山である剣山を貫く工事は大変な難工事でした。
石見銀山などから岩を掘ることにかけては
専門家である工事人を集め、
三年の歳月をかけ工事は完成。
それは「日吉の切り通し」と呼ばれました。
「これで洪水はなくなる」「よかったよかった」、
誰もが完成を喜び、
これで豊かな日吉村になると思ったのですが・・・・

7

それから二年後のこと。降り続いた大雨で
意宇川を流れる濁流はものすごい勢いで、
切り通しに流れ込んだのです。
わずか七間の幅しかない切り通しにぶつかった水は、
瞬く間にあふれ、堤防をやぶり、
村中をのみこんだのでした。
村人は再び落胆し、神聖な山である剣山を
断ち切ったたたりではないかと
うわさするようになりました。
それ以来この切り通しに手をつける者は
誰一人いなかったのです。

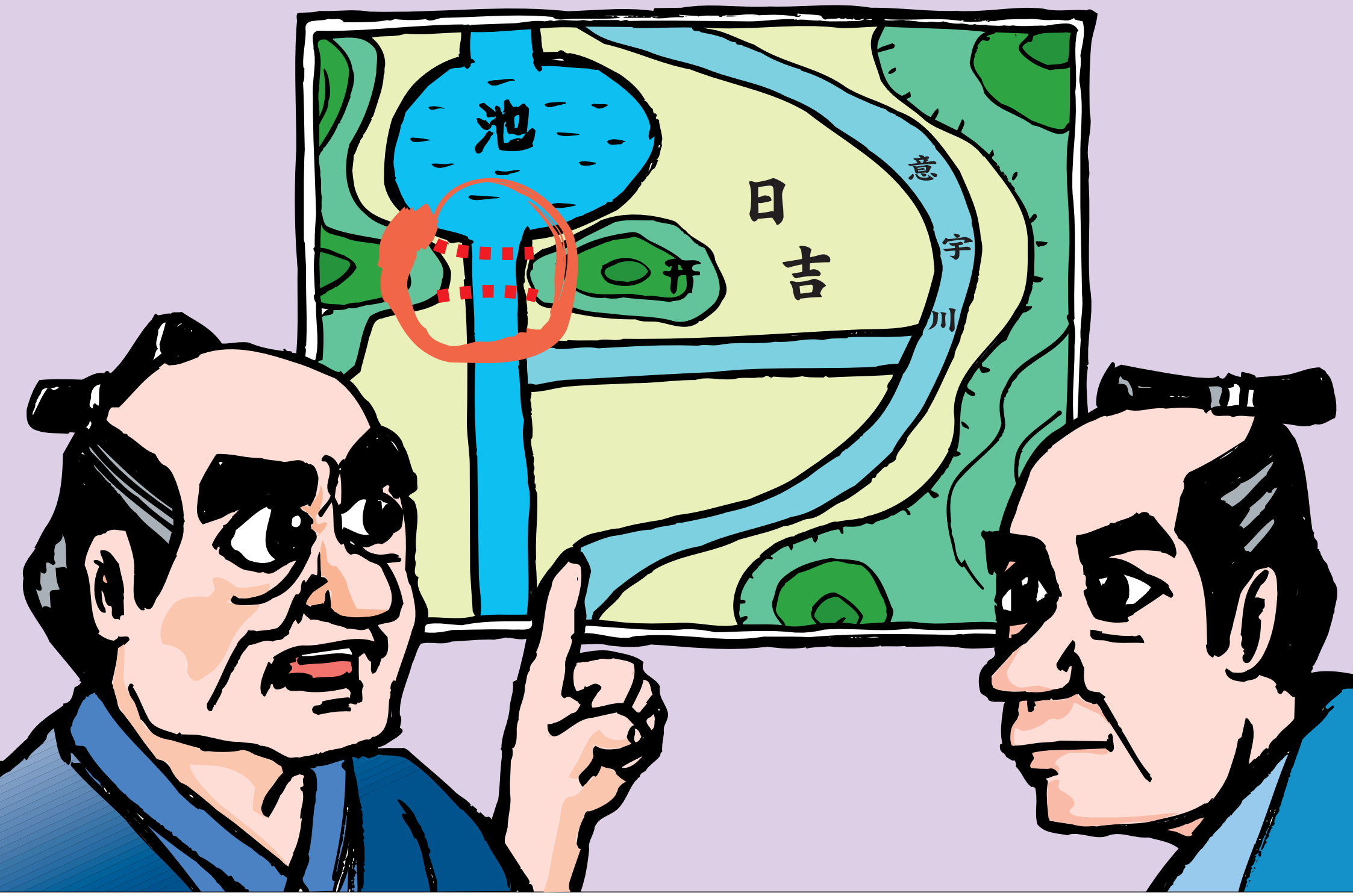


8

彌兵衛は思いました。「おじいさんの決断は正しい、
この日吉村を救うのはやはりこの「切り通し」しかない。
切り通しの幅を少しでも広げなければ・・・」。
彌兵衛は切り通しの拡張工事を何度も
松江藩にお願いしました。
しかしこの頃松江藩の財政はとても苦しく、
ましてや無駄になった一期工事の二の舞はごめんだと、
とりあってはくれませんでした。

9

しかし彌兵衛の決心はとても固いものでした。
「おじいさんの考えは間違っていない。
切り通しの幅さえ広げれば洪水は防げる。
藩が出来ないなら自分の力でやるしかない・・・」と、
自費による工事を覚悟したのでした。
そして、この頃、大坂・大和川で行われていた
川違え工事視察の許しを得、工事の方法や
測量の術まで身につけ、
着々と準備を進めていきました。

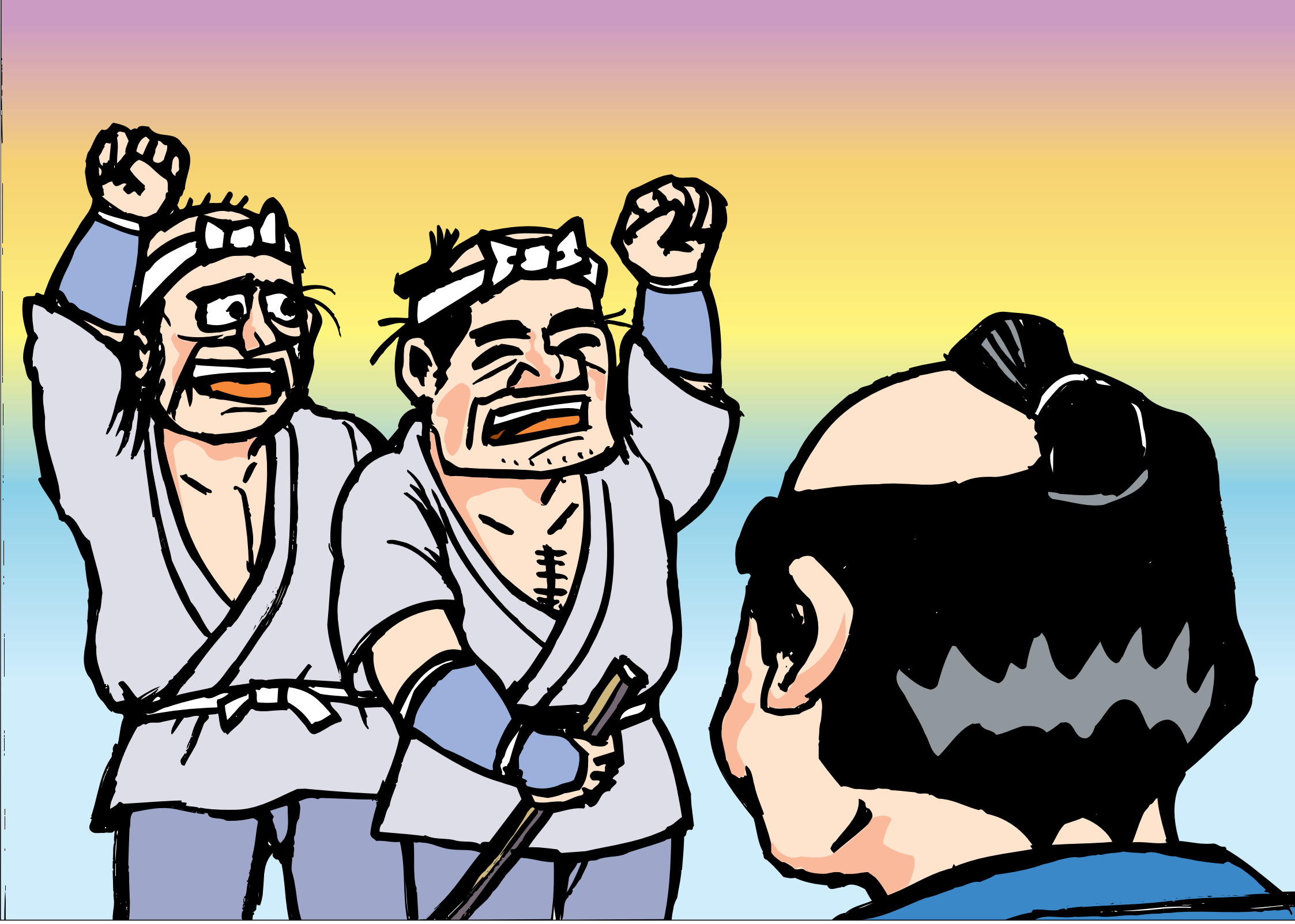


10

綿密な計算と測量のもとに、設計図をこしらえ、
松江藩に工事のお願いに上がりました。
「この切り通しの幅を広げると共に、
大水の時は、一部の水を手前の古川に、
一部の水は切り通しに流します。
そして切り通しのすぐ下に遊水池を作り、
下流の洪水にも配慮いたします。」
彌兵衛は自分の計画を松江藩に説明しました。
費用の面で藩には一切迷惑は掛けず、
自腹を切っての工事普請に松江藩も快く承諾、
銀五百目を授け、工事の許可を与えたのでした。

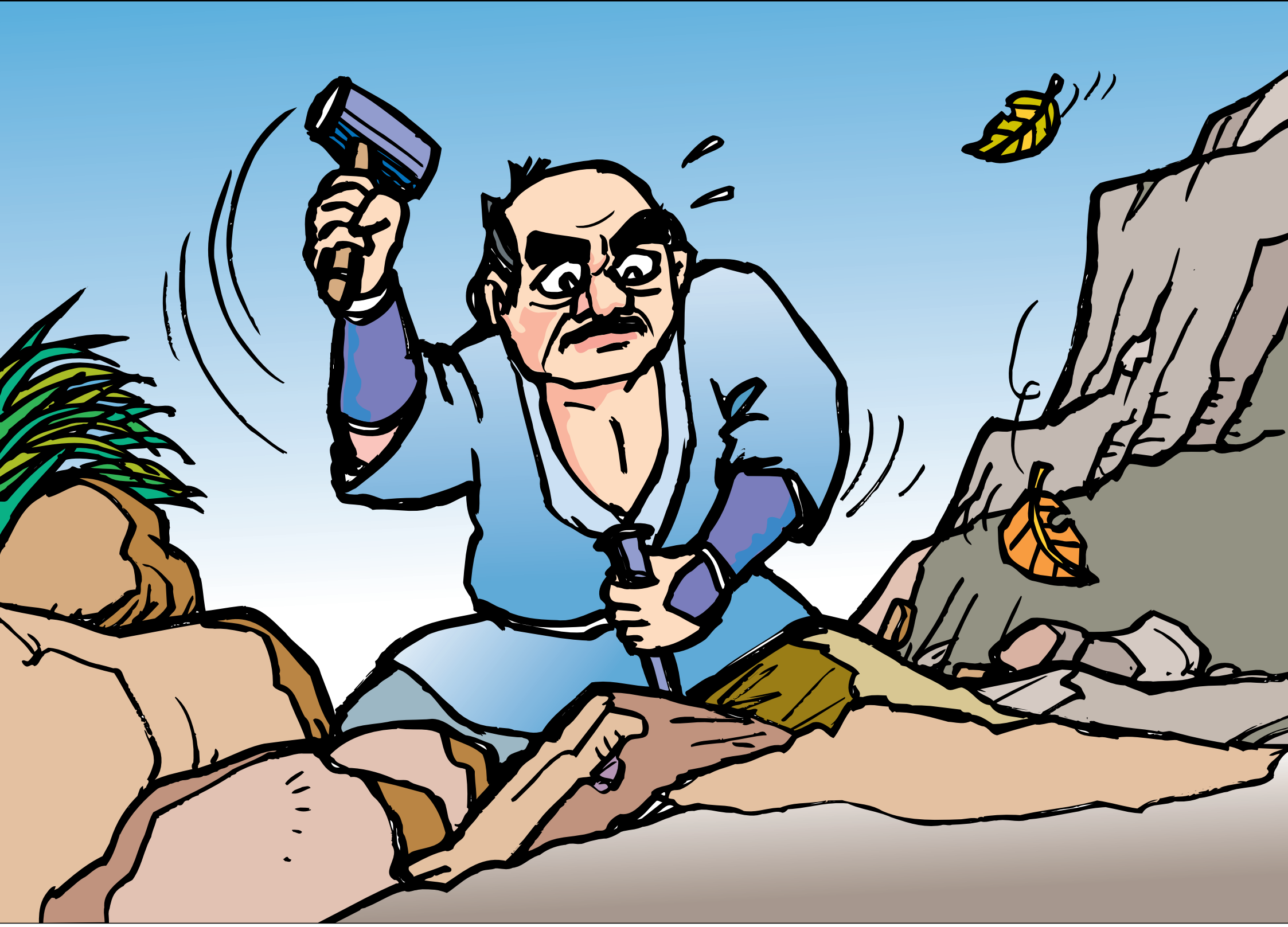
11

「いいか、皆の衆よく聞いとくれ、この村を
洪水から守るにはあの切り通しを広げる以外に
方法はない。難しい工事であることはわかっているが、
なんとか皆の力を借りてやり遂げねばならん」・・・
と説明する彌兵衛。「だども、先々代の旦那も
おんなじことをいわっしゃったらしいぞ。」
「わしら今度ばかりはいやじゃ」
「そうじゃ、あの神聖な剣山に穴をあけたりすると
タタリがおそいわ」
だれも彌兵衛に従うものはいませんでした。



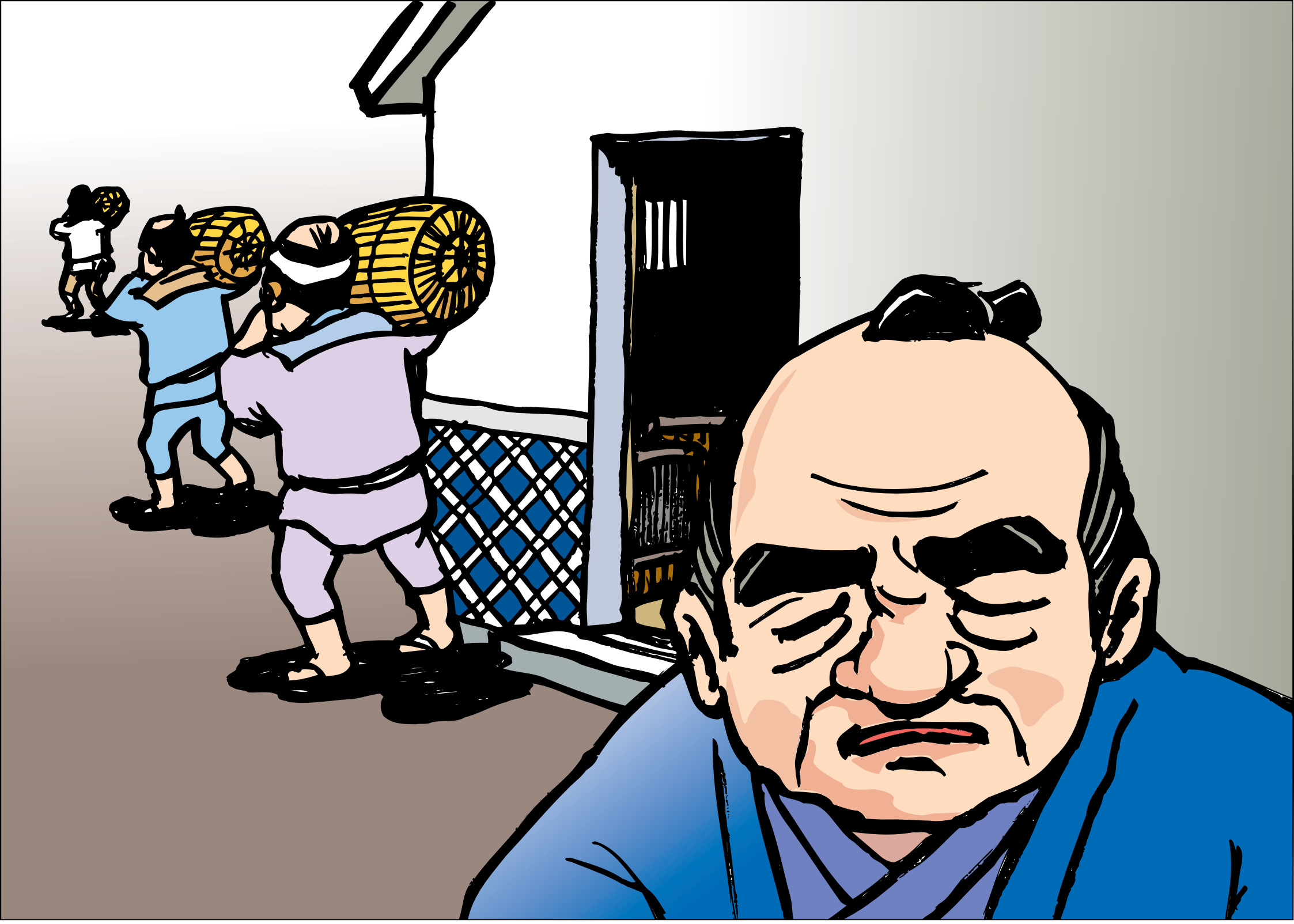
12

彌兵衛はくじけませんでした。
近くの村から集めた人夫は二十数名、
しかし日吉村から参加した者は
一人もいなかったのです。
「旦那、わしら、よそもんじゃけん、タタリもなにも
恐いものはないけん」「さぁ、みんな頑張ろうぜ」
こうして初代彌兵衛家正に続き
日吉村を洪水から救うための大事業が
スタートしたのでした。
それは彌兵衛五十五歳のときでした。



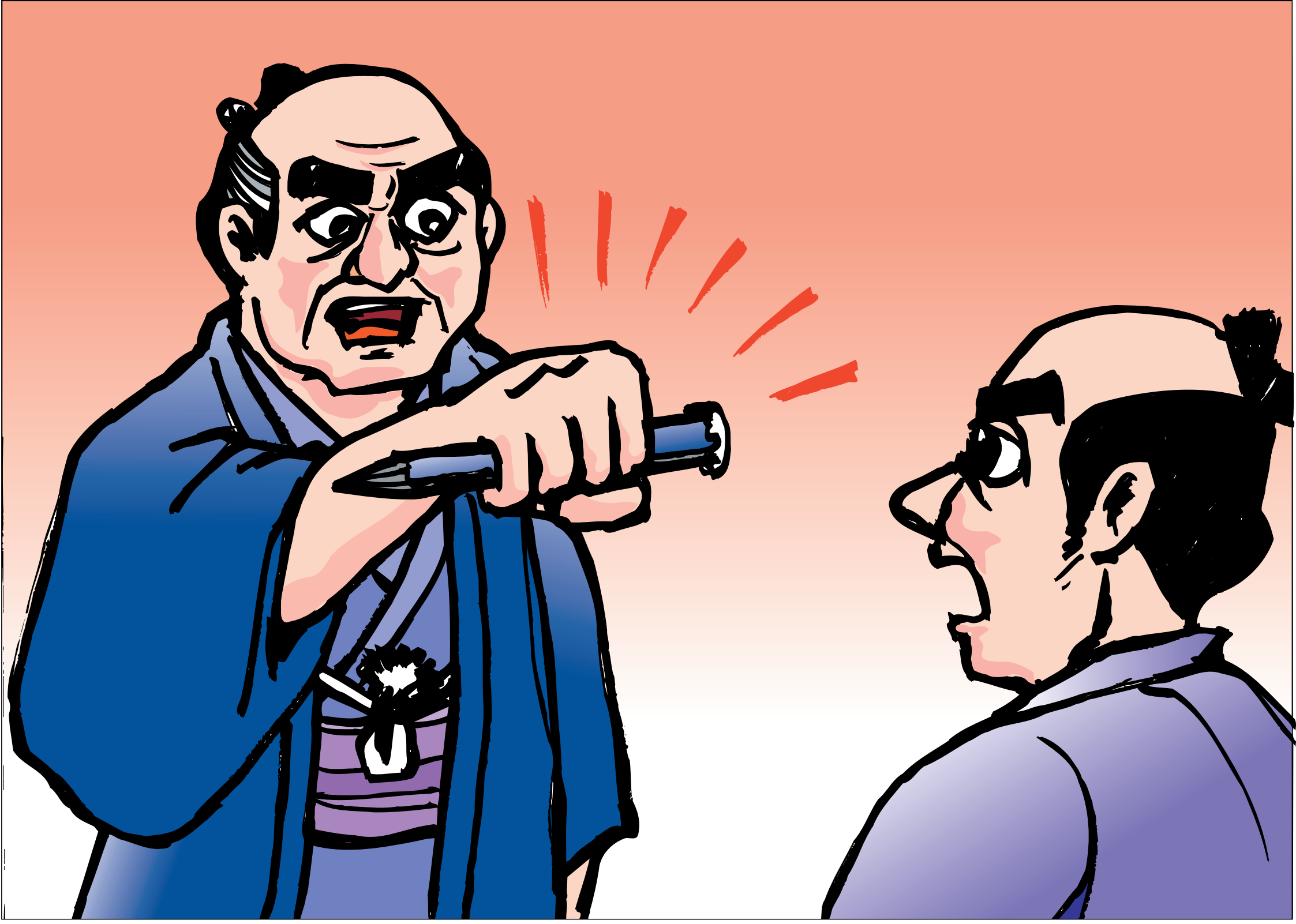
13

人夫たちは切り通し周辺の川の整備にとりかかり、
彌兵衛はたった一人で切り通しの岩切りに
とりかかったのです。「カキーン！カキーン」
ノミを打つ槌音が村中に響き渡りました。
緑に輝いていた山々もいつしか赤く色づく頃になりました。
それでも「カキーン！カキーン」
槌音が日吉の村から消えることはありませんでした。
やがて5年の歳月が流れ、
切り通し第二期工事は終了しました。
広げられた切り通しを意宇川の清流が
陽の光をうけてキラキラ輝いて流れています。
水面に映る彌兵衛の顔にも深いしわが
目立つようになっていました。



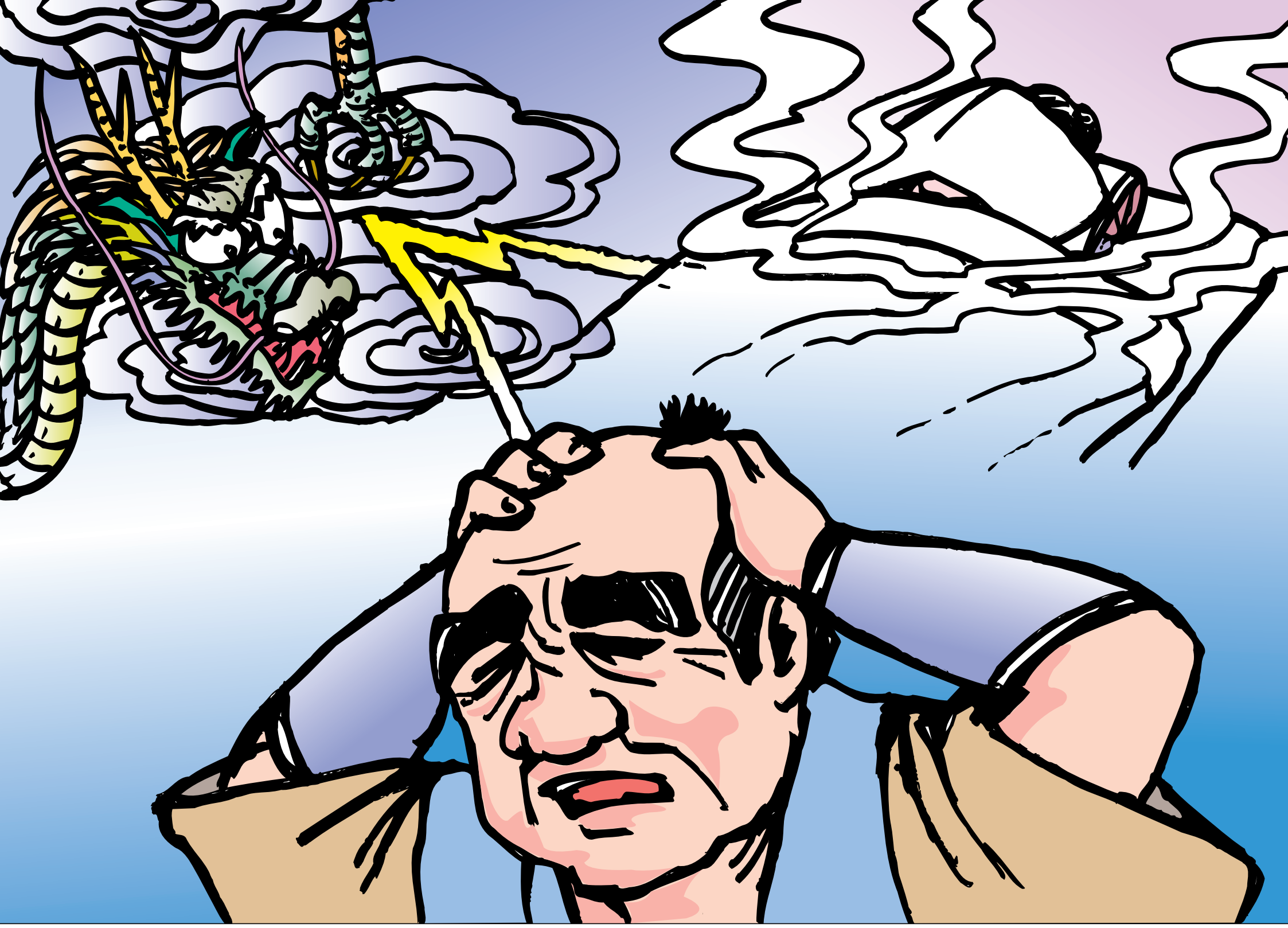
14

還暦を迎えた彌兵衛は長男の勘六を呼び、
「ワシももうこの歳じゃ、下郡の職はお前に譲る。
それから・・・お前が継ぐべき田畑は
ワシのわがままからほんのわずかになってしもうた。」
彌兵衛は蔵の米は売り払い、田や畑、
山林までも切り崩して、人夫の賃金にあてていたのです。
「しかし、これもみなこの日吉村のためじゃ、
皆の幸せには代えられん、許せよ」



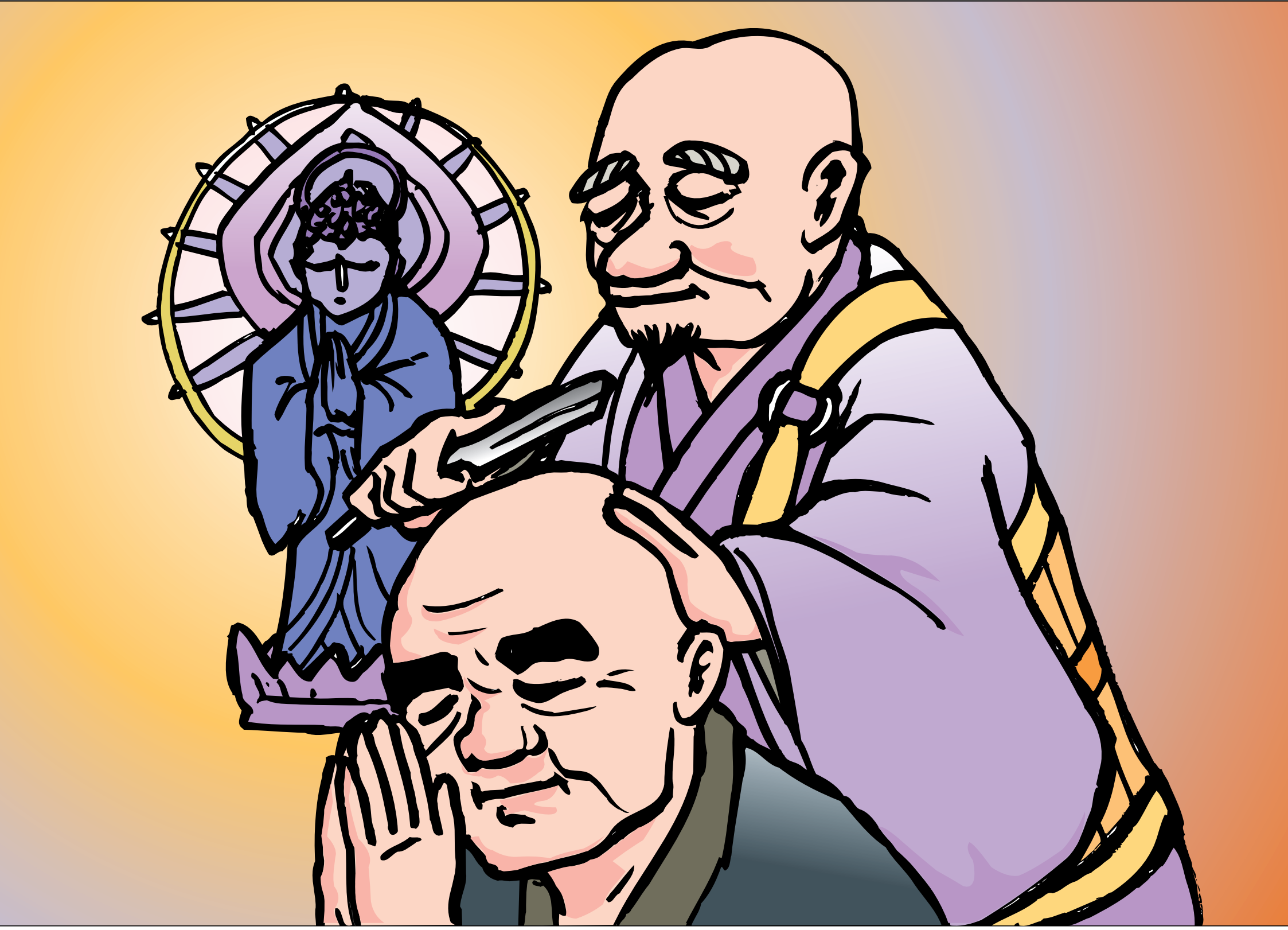
15

長男に職を譲った彌兵衛は「よし、これで
誰に遠慮することなく、ワシの目標にむかって進むことができる」
「お父様、一体これから何をなさるというのですか？」
彌兵衛は懐から一本のノミを出しました。「まさか・・・・」
「そうだ、あの切り通しは広くなったとはいえ、
元禄十五年の時のような大水が出ると、
田畑はまた流されてしまう。あと三間は間口を広げなければ」。
村の人の助けも借りず、人夫も雇うことなく
一人で切り通しの工事にかかる決意をしたのです。



16

「カキーン、カキーン」日吉村に三たび槌音が響きました。
来る日も来る日も朝から晩まで岩に向かい、
ノミを振るう彌兵衛を見て、村人は言いました。
「周藤の旦那はとうとう狂っちまったぞ」
「龍神様のたたりじゃ、お気の毒にのう」。
病気で寝込んでいた娘が亡くなったという知らせも
この現場で聞いたのです。
さすがの彌兵衛も心が乱れ、工事に集中できなくなりました。
「これはワシの心の弱さだ、こんなことで
くじけるわけにはいかん」。



17

彌兵衛は正林寺の住職を訪ねました。

「ワシは出家をしようと思います。なにとぞ

よろしくお願いいたします…」

娘の菩提を弔いながら切り通しを完成させるため、

僧になる決心をしたのです。

正徳三年一月十四日、

彌兵衛の得度式が正林寺で行われ、

この日より周藤彌兵衛は法号「良刹」と名乗りました。

18

心の迷いから解き放たれた彌兵衛は、
再び岩壁に向かったのです。
一人で岩切りを始めてから、
じつに十四年の歳月が流れていました。
長男の勘六が病気で亡くなり、
まもなく妻のクニも亡くなりました。
彌兵衛は自らお経を読み弔うと、
初七日がすむやいなや岩場にもどり、
その悲しみを振り払うように岩を切り続けました。

19

九十歳になっても力強い槌音を響かせ、
一途に岩を切る彌兵衛の姿はまるで
神様を思わせるようでした。
村の人もそんな彌兵衛の姿にひかれ、一人、また一人と
ノミを手に集まってきました。
「旦那さん、ワシらの村はワシらみんなで作るのが筋じゃ」
「洪水が無くなれば助かるのはワシら農民じゃ、
みんなで手伝いますけん」。
そして工事は急激に進み、
ついに完成のときを迎えたのです。
延享四年（一七四七）春、彌兵衛は九七歳になっていました。

その後の日吉村は洪水に襲われることもなく、
豊作が続いたのはいうまでもありません。
自分の一生を切り通しの完成のために捧げ、
財産までも投じて人のため村のために尽くした彌兵衛は
百二歳という天寿を全うし、やすらかな眠りについたのでした。
岩よりも固い信念と情熱は、年老いた彌兵衛の体を
奮い立たせ誰にもまねのできないパワーをうみ出したのです。
この八雲の地を訪れたときは、ぜひ彌兵衛の心に
ふれてください。自分は何をなすべきか、地域のため、
日本の、いや世界のなかでどう生きていくべきか
しっかりと考えてほしい・・・。周藤彌兵衛はきっと
そう思っているに違いありません。

おわり